

『艶容女舞衣』

「艶容女舞衣」は、安永元年（一七七二）初演。竹本三郎兵衛・豊竹応律ほかの作。上中下三巻の内、「酒屋の段」は下巻にあたる。元禄八年（一六九五）に大坂長町美濃屋平左衛門の養女三勝と、大和五条新町赤根屋の半七が、千日前の墓所で心中した事件に取材。

生玉神社の東側、上塩町の酒屋で、丁稚の長太が居眠りする幕開き。隣家から「可愛らしい前髪を」という、宮菌節の「万年草」を稽古するのが聞こえる設定。幼子を抱いて、酒を買いに来た謎の女性（のちに三勝とわかる）が、買った酒樽を長太に持たせて出てゆく。やがて女性は、生玉神社の蓮池にある弁財天で、長太に幼子を預けたまま行方不明、「進上茜屋半兵衛様」という書き付けから、捨て子とわかるのが導入部。

「こそは入相の、鐘に散りゆく花よりも」から、ヒロインお園が、父宗岸に連れられての出。十七歳で嫁いでから二年、夫半七には三勝という愛人があって、かえりみられない処女妻のお園は、一徹な父宗岸が実家に引き取っている。しかし、泣いてばかりいるのを心配して、やはり復縁を申し入れに来た、という複雑な事情。地味で陰気な語り出しは、六代目鶴澤友次郎いうところの「灰色の哀愁が舞台の隅々にまで淀んで、そのためお客の気持までが自然と暗くなる」という情景を描写。表の戸を閉めにかかった姑が出会い頭に父娘を見つめる、「これはこれは宗岸さま、そちらにいやるはお園じゃないか」だけでも、黄昏時の見えにくさ、距離感、意外な喜び、親しみ、しかし不審、と幾重にもかさなる要素があり、この徹底的なりアリズムの細密描写の積み上げが、世話物の醍醐味ともいうべきところ。

姑は親しみをみせても、舅半兵衛は厳しい対応。宗岸の真情、お園の遠慮。実は半兵衛の態度には秘密があり、半七が人殺しの咎人となり、半兵衛は身代りに縄にかかっているのです。宗岸にそれを突かれて半兵衛の態度は水解、宗岸もまた、お園を戻すのは半兵衛夫婦に仕えさせる心であることを明かし、四人の思いは溶け合って涙を流すことに。半兵衛が述懐の内に咳き込むのは、初演から三十六年後の文化五年（一八〇八）に三代目竹本綱太夫が演じた時に工夫したものと伝わる。

一人残ったお園のクドキ、「今頃は半七さん」といえば、かつては知らぬ者のない一節。三味線の名人初代鶴澤道八が「どこにどうしてござろうぞ」のあとの「チン」という一撥に心労して、巡業の間の一年余を悩み続けた芸談もあるほど（『文楽聞書』）。人形では、門口から外を見て始まる型、行灯を用いて始まる型、娘風の髪型、若妻風の髪型、土間への降り方にもいく通りかの演出がある。後ろ振りでの嘆き、足拍子の効果、吐息の表現。「わしというものないならば」という、令和の時代では考えられない心情。江戸時代の女性は大変だなあ、ではないはず。江戸時代にもこんな女性は普通にはいなかった、だからこそ劇の主人公となる。仮想現実

と見まがうばかりの、絶対的純粹結晶としての貞淑の究極。それがお園であり、江戸時代人にとっても驚異の存在だったというべきか。名だたる名手たちが、女形人形の最終目標にあげる役である所以。

導入部の捨て子がハイハイしてきて、かねて顔を知るお園が、三勝の子お通と気づく。懐の書置をみなで廻し読みする内に、順次、事情がわかってくるという設定。隣家で稽古する上方唄「妹背川」と併せて、「ダレさせないため」（『山城少掾聞書』）の工夫というべきか。この内、「いふ声漏るゝ三勝が」からは、門口で漏れ聞く三勝と半七に焦点が移り、「親は外面に血の涙」、「おさらば／＼」など、三味線が段切れを締める。

（児玉竜一）